

ひょうごの草原 ～人が育んだ草原と生き物の歴史～

期間：令和2年10月10日（土）～
令和3年1月7日（木）
会場：兵庫県立人と自然の博物館
2階ひとはく多様性フロアほか

かつては人と共存してきた草原

皆さんは、草原と聞くとどのような風景を思い浮かべるでしょうか？ 映画で出てくるような一面の大草原は、今や日本では一部の地域を除いてほとんど見かけなくなりました。しかし、実は1940年代頃までさほど珍しいものではなく、むしろとても身近な風景でした。かつて人々が化石燃料にあまり依存していなかった頃、刈り取った草は茅葺の材料や牛馬の餌として非常に重要な資源でした。そのため、草原は人々にとってなくてはならない大切な存在だったのです。定期的に火入れや草刈り、放牧をすることで、広い面積の草原を人々は育んできました。

しかし、高度経済成長期とともにそうした人と草原の共生関係は終わりを迎えます。もはや生活のために草が必要なくなった現在、草原面積は開発や植林によって急激に減少していききました。開発や植林などがなされなかった地域でも、草原は草刈りなどの管理がされず放置されると、いずれは森林に変化してしまいます。その結果、日本国内では過去100年間で草原の面積が10分の1以下にまで減少してきたといわれています。兵庫県も例外ではありません。かつて非

常に広い面積の草原が存在していましたが、今や砥峰高原や上山高原など一部を除き、まとまった面積の草原はほとんど見られません。

草原の素晴らしい生物多様性とその危機

草原には春から秋にかけて非常に美しい花々が咲き乱れます。秋の七草（キキョウ、オミナエシ、ワレモコウ、カワラナデシコ、ハギ類、フジバカマ、ススキ）も、草原に多く見られる植物です。そうした花々には、蜜を求めてハナバチやチョウなどが訪れます。さらには、昆虫などを食べるためにカヤネズミなどの小動物が、またネズミを食べるためにホンドキツネやイヌワシが集まります。結果的に、草原では非常に生物多様性が豊かな生態系が育まれています。

しかし、草原環境が危機的な状況になっている現在、草原にすむ生き物の多くが絶滅の危機に瀕しています。かつて普通に見られたであろう秋の七草のうち、キキョウ、オミナエシ、フジバカマなどは、多くの都道府県で絶滅危惧種とされています。最も危機的な状況となっている生き物のひとつが、ウスイロヒョウモンモドキです。

このチョウはかつて中国山地に広く分布していましたが、90%以上の生息地で絶滅してしまいました。今や国内では、兵庫県を含む数か所で見られるのみです。



写真3 イヌワシ



写真4 ウスイロヒョウモンモドキ

貴重な草原を守ろう

こうした危機的な状況にある草原ですが、実は意外な場所で生き残っています。例えば、河川の堤防や棚田の畦畔、スキー場などです。こうした草原で、かろうじて命をつないでいる生き物も

少なくありません。小面積ではあるものの、生物多様性の豊かな草原は、今後も守る価値が非常に高いと言えます。現在もかろうじて残る草原をどうやって守り、将来につなげていくかについて、日本各地の研究機関で研究が進んでいます。また最近、草原の生物多様性の豊かさが注目され、各地で保護の動きが進んでいます。六甲山系の東お多福山は、市民団体を中心に保全活動が進められている草原です。かつて六甲山地には広大な草原が広がっていたとされていますが、今や六甲山地でまとまった草原が存在するのはここだけです。東お多福山では貴重な草原性の生き物が今も生き残っており、かつての六甲山地の面影を今に遺す非常に重要な地域です。

今回の企画展では、兵庫県の草原と生き物の歴史をご紹介します。そこには思いもよらなかったワクワクや発見があるかもしれません。かつては身近だったはずの貴重な草原とその秘密を是非ご覧ください。

中濱 直之（自然・環境再生研究部）



写真1 砥峰高原の草原環境



写真2 カワラナデシコ



写真5 東お多福山での保全活動の様子